



歴史研究家
現代龍馬学会 会長
永国 淳哉



県立歴史民俗
資料館 館長
宅間 一之

M・ジャンセン先生に言われて気が付いた。通常“未来”に向かう歴史研究といいながら、偉人の“過去話”の自伝を基礎とする。しかし、龍馬には“自伝”がない。時流を知り「エヘンエヘン」の手紙と龍馬を育てた風土・文化の歴史的事実研究を目指したい。



徳島大学名誉教授
渋谷 雅之



高知新聞
編集委員
片岡 雅文

現代の龍馬人気は小説やテレビドラマの影響が大きいと思われますが、一方で、しつかりした史料により眞実を解き明かし、龍馬が果たした歴史的役割を考えることは、ますます重要性を増しています。現代龍馬学会が楽しく意義深い学会に発展することを祈ります。



エッセイスト
渡辺 瑠海



坂本龍馬記念館
学芸員
三浦 夏樹

混沌殺伐とした世の中。幕末土佐人の互助精神と、自ら未来を変えようとする土佐人スピリッツは、現代人に最も必要とされる力です。現代龍馬学会が、より多くの識者の交流と討論の場となり、大人のための全く新しい「現代の寺子屋」となることを願っています。



坂本龍馬記念館
学芸主任
前田 由紀枝



坂本龍馬記念館
館長
森 健志郎

龍馬という人は巨象と同じで、切り口次第で様々な貌を見せます。龍馬、人々、時代、政治、経済、風俗…。現代龍馬学会から龍馬を介した知的な面白さを発信していきたいのです。この学究の場づくりは、県立坂本龍馬記念館の使命のひとつでもあるからです。

龍馬は多くの人々に愛される。それが高ければ高いほど創作や空想も数多く闊歩する。龍馬の実像を史料に基づいて明確にとらえ、その動きを歴史の流れの中で位置づける。そこから現代に生きる龍馬の思想を追わねばならない。現代龍馬学会の成果を期待したい。

坂崎紫瀾が小説「汗血千里駒」を書いたのは、坂本龍馬を自由民権運動の先駆者と見たからでしょう。以来百年余り、龍馬は時代ごとにさまざまに語られてきました。私たちのこの学会も、現代における新しい龍馬像を創り出すことができればと願うものです。

博物館法に定められた博物館業務の大きな柱は、資料の収集・保管・展示・教育普及・調査研究が挙げられる。この中で当館の大きな課題となっていたのは、調査研究である。この学会で研究したことを基に、龍馬の業績を正しく顕彰し、志を伝えたい。

館長就任二年で、人後に落ちぬ龍馬ファンになつた。特に勉強したからと/orいのではある。入館者の皆さんに寄せ死してなおこの人気。人間の魅力の原点を見せつけられた思いである。しかも快い。その“熱”を伝えたい。